超短編⑤

「百万本の薔薇」(20020728)

１万本のバラを贈る男

嘘のような話である。

ある男性が女性にふられた腹いせに、その自分をふった女性の自宅に１万本のバラを贈っていた、しかも１０年間に１００人の女性に贈っていた、というのである。

男性の名は榊原譲（仮名：東京都在住／36 歳）資産家の家に生まれ、幼い頃から何不自由なく育てられたが、成人してからは女性には不自由していたようだ。

話は１０年前に遡る。

榊原は当時２６歳で、父親の経営する大手貸ビル会社の役員であった。

富豪の御曹司にして独身、有名大学を卒業し、身長１８０センチの長身で中肉中背、顔もそこそこ、とくれば当然女性が放っておくはずがなかった。事実、学生時代には女性に不自由するどころか、やりたい放題、好き勝手をしていたらしい。

当時の同級生はこう語る、「譲は常に４、５人の彼女を所有していた。毎日服を着替えるように女も替えていた。それもみんなモデルのような美女ばかり。彼はけっして自分の彼女を友人に譲ることはなかった。『ゆずる』というのは名ばかりのけちな奴で、男には皆から嫌われていた」

それがどういうわけで、１０年間に１００人もの女性にふられる、もてない男になってしまったのだろう。

それを解く鍵は、やはり学生時代の別の友人の言葉の中にありそうだ、「あれほどの美女に囲まれて生活していながら、彼はよく『本当の恋をしてみたいものだ』とまじめな顔をして語っていました。当時は本当に嫌味な奴だなと思っていました」

榊原はいつしか、本当の自分、ありのままの自分、金持ちであるとか、会社役員であるとかの肩書きのない、素顔の自分を愛してくれる、そんな女性と本物の恋愛をしてみたいと切に望むようになっていたのだった。

そしてそのために彼のとった行動は、全く奇想天外なものであった。

アフター５は浮浪者に

彼は毎日、仕事が終わるとまっすぐ家に戻り、浮浪者の格好に着替え、また街に舞い戻り、夜の繁華街を彷徨い歩いた。

彼は街で好みの女性に出会うと、こっそり後をつけ女性の自宅を確認し、翌日、女性が帰宅する時間を待って、近くで待機し、女性が家のそばまで来たところで、病気にでもなったふりをして、大袈裟にもがき苦しんだ。

大概の女性は無視をした。

しかし中には心配してくれる女性もいた。大抵は救急車を呼ぼうとしてくれた。
そんな時、榊原はこう言った、「ありがとうございます。でも救急車は結構です。私は見ての通りの浮浪者です。保険に入ってないのはもちろん、うっかり治療を受けたところで、払える治療費もありません。もし、よろしければ1杯で結構ですから、お水をいただけませんか」
ここでまた、半分くらいの女性は『こんなにしゃべれるなら、放っておいても大丈夫だろう』と榊原にたった1杯の水すら与えなかった。
そして半分くらいの女性が、榊原に水を持ってきてくれた。「ありがとうございます。あなたは優しい方ですね。どうですか、私とお付き合いしませんか、きっと私はあなたを幸せにしてみせます。」
榊原のこの言葉は真実なのに、残念ながら彼のこの言葉を信じた女性は一人もいなかった。大抵は笑うか、逃げるか。中には怒ったり、家からお父さんを呼んできたり、亭主や恋人を連れてくることもあった。警察を呼ぶと、騒がれたこともあった。

最初は感謝の気持ちから、いつしかそれが習慣に

1万本のバラは、初めは純粋に感謝の気持ちで贈ったものであった。
それは10年前のこと、最初に水をくれた女性は、榊原の誘いに対して「ありがとう。でも私にはすでに恋人がおります。残念ですが、あなたとお付き合いすることはできません」と謝った。
榊原はこの女性の誠意にいたく感動し、「感謝と愛を込めて」と書いたカードを添えて、彼女に1万本のバラを贈った。

水をくれた2人目の女性は榊原の誘いの言葉を聞くと、「おとうさーん」と叫んで家の中に逃げ込んでしまった。
榊原は「逃がした魚は大きいと言う」と書いたカードを添えて、彼女に1万本のバラを贈った。

3人目の女性は、榊原の誘いの言葉を聞くと「あなたみたいな浮浪者が、私をどうやって幸せにしてくれるというの？」と言って、大きな声で笑った。
榊原は「これでもくらえ！」と書いたカードを添えて、1万本のバラを贈った。

榊原はいつしか、バラを贈られた女性の、とまどう顔を想像することに快感を覚えていった。
そうこうするうちに10年が経過した。
バラの出荷本数も、いつの間にか100万本に達していた。

100万本のバラ達成記念

榊原譲は先月、過去10年間で累計100人の女性にふられたのを機に、「100万本の

バラ達成記念」と称して都内某有名ホテルに、今まで自分をふってきた女性１００人を招待して、豪華なパーティを催した。
悲しいことに、１００名招待したにもかかわらず、当日参加したのは、たった３名だけだった。
その３名も「大量のバラが贈りつけられたのは、よく憶えているけど、この男性には全く記憶がない」とか
「なんのパーティなのか、知らずに来てしまいました。いまだに、何のパーティなのかわかりません」とか
「姉に言われて、代わりに来ただけです」とか
散々悪態をついて帰ってしまった。
榊原は「こうなったら、憎たらしい女どもに、これからもバラを贈り続けてやる。１００万本達成記念パーティをやるまでは、死んでも死に切れない」と一人熱くなっていた。

超短編シリーズはフィクションです。念のため